

暮らしに生きる川の水と身近な水の施設

水は私たちの生活の中に欠かせないものです。
 飲み水はもちろん、炊事や洗濯、風呂水など、直接暮らしにかかわるものから、
 水遊びや魚釣りなど、日常にうるおいを与える水もあります。
 今回は、川の水を活用してきた高時川流域で、水の施設を通して暮らしと水のかかわりを探ってみました。
 上流域の余呉町上丹生にお住いの山根茂子さんと中流域高月町井ノ口にお住いの本田靖子さんに、
 川と水と暮らしについてお聞きしました。

流れ川に井戸端をこしらえて利用する

余呉町上丹生は、高時川の上流域にある集落です。上丹生で生まれ育った山根茂子さんは、山里の生活や風俗習慣の貴重な体験を次世代に伝えておられます。

「昔は水くみが大変でした。私が嫁にきた頃は、前の流れ川で何もかも用を足したんです。まず、朝五時にお寺の鐘が鳴ると同時に、村中の女性がいっせいに流れ川に水を汲みに行くの。ご飯炊いたり、お茶などの飲み水にする水です。日中は、野菜洗いや洗濯物、農具洗いやなどに川を使います。やろ、だから朝一番やないとダメなんです」。流れ川とは、上丹生の上流にある摺墨の集落を流れる摺墨川から引いた水路のこと。現在も幅50センチほどの流れが、山根さんの家のすぐ近くで勢い良く水音を立てています。

「今はコンクリでふたがしてありますけど、以前はもっと広くて、各家が洗い場をこさえていました。井戸端といいますが、板で流れを仕切って水を落とすし、バケツで水を汲めるように使いました。でも洗濯はしましたが、風呂の水はユドノという穴を各家がこしらえて、使った水はそこへ流したんです。決して川には流しませんでした」。

流れ川から水道利用へ、便利になってみて

山根さんの家は上丹生の一集落の中でも早く、山から谷水をパイプで引いて使用していたといえます。しばらくして集落全体が摺墨の奥の谷から山水利用の簡易水道

いえば、お風呂にもメダカがたくさん入って、ゆでられてかわいそうなことでした。「飲用水は共同の掘り井戸へ汲みに行きました。それが子供や女性の仕事でした。天秤棒でバケツを二つぶら下げて、慣れたら片手にかした米やもう一つバケツ持ってね」。井ノ口には百軒の家に全部で7ヶ所の井戸があったそうです。この辺りは地下

水の出る層が深く、共同で井戸を掘ったといえます。本田さんの近くの井戸へ行ってみると、建家がこしらえられ、花崗岩の立派な井戸枠が残っていました。傍には子供たちが仕事を終える母を待って、ままごと遊びをした「母待ち石」が残っています。「井戸は井戸仲間というのがあって、共同で冬場にはつるべの縄をなったり、井戸替

えの世話したりしたんです」。本田さんの前の川には、小さな降り場がこしらえてあります。周りを見渡すと、お隣にもあります。鉄板でこしらえた降り場もありました。近所には屋根のある洗い場もあります。水道ができた今でも、洗い場はまだまだ活躍しています。「洗い場はコンクリートに護岸される時にこしらえても



▲山根さんの家の近くにある洗い場 以前は農具洗いやなどに使われていた



▲サトイモを洗う水車



建家のある井戸▶



茶わん祭の館にて撮影

▲昔使われていた手桶や水つぼ

を引いて使用するようになり、その後、現在の地下水を汲み上げる町水道になりました。

「水道を引いてみて、何でもこんな便利なことを早くしなかったのかと思います。チョーオケ（手桶）で毎朝水をくみに行って、それを台所にある水つぼに溜めて、一日使えますが、水くみが辛くてね」。上丹生の全世帯が流れ川を利用したので、使うときのルールはあったようです。たとえば、上流の摺墨でパイ（カヤの実のような木の実で食用）を洗うと多量の油が出て水が汚れるので、川で直接洗わないようにお触れが出たと山根さんは言います。

川の水は洗い物に、飲み水は掘り井戸から

高月町井ノ口は、高時川の右岸にある農村です。民家の中を大中小の幅で幾筋もの水路が流れています。本田靖子さんは同じ井ノ口に生まれ、今の家へ嫁いでこられたそうです。「私の里にも、こと同じように川が流れていて、何でも洗い物をしました。ここに来てからも、ずっと川の水は利用しています」。本田さんが言う川とは、高時川から引かれた水路のことで、1メートル幅ほどの流れがせせらいでいます。

「以前は底が砂利で水もきれいでした。モロコやジャコ、アユなどの魚もたくさんいました。子供たちの遊び場であり、大人たちは魚釣りをしたり、洗い場にしたりと、川を一日も使わない日がなかったですね。川の水は主に洗い物、野菜、洗濯、庭木の水やりなどでした。川は流れがあつて汚れがよく落ちます。ナベヤカマ、おひつを浸けて置くと、小魚が入ったりしてね。そう

らいました。今でも野菜洗いに使っています。橋に棒を立てて水車を回して、里芋も洗いますよ」。

井戸水、川の水、山の谷水、それぞれが土地土地によって、うまく使い分けられていた高時川流域の暮らし。簡単に水を使うことに慣れ、便利になった今日、私たちは水への関心が少し薄れているのかもしれない。もっと自然と触れ、水と親しむことで、今一度、水の大切さ、水との上手な付き合い方を学んでみなければ、と感じさせられた二人のお話でした。

※今回の取材にあたっては、滋賀県立琵琶湖博物館による水環境カルテ調査をもとに、同博物館のご協力を得ました。

滋賀県立琵琶湖博物館

草津市下町町109番地 TEL07775684811

開館時間●9時30分～17時（入館は16時30分まで）

休館日●毎週月曜・休日の翌日・年末年始（12月28日～1月4日）

※月曜が休日の場合はその翌日が休館日

※休日の翌日が土曜・日曜の場合は、開館します。



本田靖子さん

昭和9年高月町井ノ口生まれ。農業の傍ら、町の特産加工をしたり、地域の方とボランティア活動をされている。



山根茂子さん

大正7年余呉町上丹生生まれ。農業の傍ら、学校・婦人会・老人会など各地で講演し、余呉町の風習を今に伝える。